

離脱動詞と移動動詞の比較

— 「とれる」「おちる」を中心に —

李 響

要 旨

本稿では、「あるものがあるところからはなれる」という意味を表し、かつ、移動自体に重点がない動詞を離脱動詞と呼ぶ。そして、「とれる」は離脱動詞であり、「おちる」は離脱動詞、移動動詞の用法を持つこと示す。移動動詞の「おちる」と離脱動詞の「とれる」「おちる」を比較することで、＜全体-部分＞の関係にある名詞が離脱動詞のガ格にとることがわかる。そして、「全体」が明示されていない場合には、離脱動詞を用いることで、ガ格名詞はある物の部分と解釈される。また、離脱動詞である「とれる」「おちる」は「物が「なくなる」」を表すことを示し、さらに、そのことから、二格を取らないことが導き出されることを示す。

キーワード

離脱動詞 移動動詞 全体-部分 類義語

1 はじめに

本稿では、「あるものがあるところからはなれる」という意味を表し、かつ、移動自体に重点がない動詞を離脱動詞と呼ぶ。離脱の「とれる」と移動の「おちる」は以下の(1) (2)が示すように、二格がない場合は言えるのに対し、(3) (4)のような二格がある場合は、「とれる」が言えなくなる。

- (1)a. ボタンがとれた。
 - b. ボタンがおちた。
- (2)a. シールがとれた。
 - b. シールがおちた。
- (3)a. *ボタンが机にとれた。
 - b. ボタンが机におちた。
- (4)a. *シールが手にとれた。
 - b. シールが手におちた。

また、離脱の「とれる」と「おちる」は(5)(6)のように、言い換えることができる場合と

(7)(8)のように、言い換えられない場合がある。

- (5)a. 汚れがとれた。
 - b. 汚れがおちた。
- (6)a. 化粧がとれた。
 - b. 化粧がおちた。
- (7)a. 疲れがとれた。
 - b. *疲れがおちた。
- (8)a. 粗熱がとれた。
 - b. *粗熱がおちた。

本稿は、離脱動詞である「とれる」と離脱動詞の用法と移動動詞の用法を持つ「おちる」の比較を通じて、離脱動詞と移動動詞における構文の違い、要求されるガ格名詞の違いを考察する。そして、離脱動詞である「とれる」「おちる」を比較することで、両者が取るガ格名詞のタイプを確認する。2節では、先行研究を概観し問題点を指摘する。3節では、両者の構文的な特徴を比較し、「とれる」は離脱の用法、「おちる」は移動と離脱の用法を持つことを示す。4節では、離脱動詞と移動動詞が取るガ格名詞の違い、そしてそれぞれガ格名詞に与えられる解釈の違いを見る。5節では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」¹と「筑波ウェブコーパス(TWC)」²を参考にし、離脱動詞の「とれる」「おちる」が取るガ格名詞のタイプを整理し、両者の重なりあう部分とそうではない部分を明らかにする。6節は本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2 先行研究

2.1 柴田編(1976)

柴田編(1976)では、「おちる」を「さがる」「おりる」「くだる」と比較し、これらは「あがる」「のぼる」の反意語と考えられる動詞であると記述されている。

そして、「おちる」は「意図的でない」という点で「おりる」と区別され、「到達点に焦点を合わせる」という点で「さがる」と区別される。その他、「おちる」は「物体が重力によって移動することを表す」「直線的で急速」という特徴を持つと柴田(1976)は述べている。

柴田(1976)は「おちる」が典型的な移動を表す場合を中心に論じ、(1b)(2b)のような離脱を表す例文を取り上げていない。そして、柴田(1976)の指摘している特徴は、離脱を表す「おちる」の場合に当てはまらない。

2.2 森田(1977)

¹ 検索システムとして、NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)を用いる。http://nlb.ninjal.ac.jp/

² 検索システムとして、NINJAL-LWP for TWC (NLT)を用いる。http://nlt.tsukuba.lagoinst.inf/

「とれる」について、森田(1977)には、以下のような記述が見られる³。

自動詞「とれる」は、おのずと、とった状態になること。つまり、**B**に付いて“**B**のもの”となっていた**C**が、自然に**B**から離れる作用である。そのような分離作用が物理的に可能な場合は「とる」-①に限られ、しかも分離・脱落作用が生じるのは**①C**が**B**に付属している固体「眼鏡のレンズがとれた」「ドアの把手がとれた」**②B**に付着している事物「痛み、汚れ、染み、色、匂い、渋み」など。

(森田(1977 : 334))

上記のように、「とれる」の意味を「おのずと、自然に」で記述している。しかし、(9)のような実例が見られる。(9)は、意図的に「汚れ」を取ることを表すため、洗剤などで「汚れ」を洗うことを表し、このような意図的に物を離脱させる場合には、「おのずと、自然に」という特徴は必要でなくなる。ゆえに、この特徴は「とれる」の意味に必要なかどうかを検討する余地がある⁴と考える。

- (9) 浴槽の内側はシャワーとスポンジで洗い流し、汚れが取れ、洗う際の抵抗感がなくなったことを、対象者は触覚情報と聴覚情報（こする時のキュッキュツという音）にて確認できた。 (山本伸一, 伊藤克浩, 小菅久美子, 高橋栄子編 『活動分析アプローチ』, 2005, 493)

そして、森田(1977)は、「分離・脱落作用が生じるのは**①C**が**B**に付属している固体**②B**

³ 下線は筆者による。

森田(1977)は「とれる」を「とる」の関連語として扱い、「とる」が対象のうつし方には三段階があると述べている。

①「**B**カラ**C**ヲとる/**C**ヲ**E**ニとる」

「眼鏡、帽子、雑草、魚、命、血、痛み、汚れ、……をとる」「料理を皿にとる」「蓋をとってあげる」

事物そのものをその位置から除き、他の場所に移し動かす場合には、当然、そこから事物が一部もしくは全部消え去る。

②「**C**ヲとる/**E**ニとる」

「メモ、寸法、指紋、脈、録音、写真、言葉の意味、型……をとる」「形を画用紙にとる」「ノート、テープ……にとる」

事物そのものの位置は変えずに、また、手を加えずに、その形や内容をそっくり他にひかえる。オリジナルには手を加えずに、コピーを作ること。とれた結果が「を」格**C**に来る。(略)

③「**C**ヲとる」

ある目的から事物に手を触れ、手をつけ、その事物を操作して事を行う。

「舵、鋏、ハンドル、教鞭、指揮、事務……をとる」「手に手をとって駆け落ちする」

(森田(1977 : 333))

森田(1977)は、とる主体(A)、とられる相手(B)、とる事物(C)、とる場所(E)などを設定し、「とる」には、「**A**ガ**B**カラ**C**ヲとる」「**C**ヲとる」「**C**ヲ**E**ニとる」の文型をなしていると述べている。

⁴ 本稿は、離脱動詞の「とれる」「おちる」が取るガ格名詞のタイプを整理する。離脱動作の様態を論じず、このことについて、別稿に譲る。

に付着している事物など」と述べている。

また、「おちる」について、森田(1977)には以下のような記述が見られる。

“ある位置から離れ去る作用”には二つある。一つは、そのもの全体がその位置（上位）を離れ、落下する場合、いま一つは、全体から一部が分かれて離脱する場合である。

「二階から落ちる」「砂漠に日が落ちる」「滝が落ちている」「城が落ちる」「都を落ちる」「人手に落ちる」などは前者の全体動作。“上から下へ”ないしは“上位者から下位者へ”の方向性がある。到達点は「……に」で示される。

いま一つの部分離脱は、その事物が付着していた本体から離れ取れる作用。

「歯、色、ペンキ、汚れ、匂い、香り、憑きもの……が落ちる」

(中略)

事柄によってそれぞれ“抜ける、取れる、欠ける、漏れる”といった語に置き換えられる。それが離れおちることによってマイナス状態になる場合が多い（「汚れ」などプラス状態もあるが）。こうした「落ちる」は①⁵の離脱のみが強調されて、③の到達点は意識しない。「……に落ちる」と「に」格を立てることができない。

(森田(1977 : 133-134))

上記のように、「おちる」は「部分離脱」を表す場合には、「事柄によってそれぞれ“抜ける、取れる、欠ける、漏れる”といった語に置き換えられる」と述べている。「とれる、おちる」の意味には重なる部分があることについては本稿も同意する。ただし、森田(1977)は、それぞれがどのような場合に置き換えられるかを述べていない。本稿は、「とれる」「おちる」を比較しながら記述することを通じて、「とれる」と「おちる」が置き換えられる場合を明確にする。

2.3 ケリー(2012)

ケリー(2012)は、意志性、離脱物と離脱元の性質、動作の様態などの幾つかの側面から、「とれる」と「はずれる」を比較し、考察している。「とれる」は“exit a spatial relationship by overcoming resistance.”と述べている。

「とれる」に関する特徴は以下のようにまとめられる。

- ・ Caused motion (such as a cup on a table, *torero* is permitted to be used with caused motion.)

⁵ 森田(1977)は「落ちる」には次の三つの条件があると述べている。

- ①ある位置にあったものが、そこから離れ去る作用。
 - ②そこを離れてから（引力などによって）行き着くところまで移動する作用。（主として上から下へ）
 - ③それが終局のところまで行き着くこと。
- この三つの段階「離脱→移動→到達」のどこを強調するかで「落ちる」に種々の意味が出てくる。

- Unanimacy of Figure (with a toy spider that moves spontaneously falls, *toreru* is permitted to be used.)
- Sticky attachment (It was accepted significantly more often when flue was applied to both the ladder and the shoe.)

しかし、ケリー(2012)でも“*toreru* involves preference for sticky attachment ...However, it is not clear if it is the fact of sticky attachment that is motivating this, or simply the fact that separation involves overcoming resistance(p.120).”と述べられているように、何が“sticky attachment”を起こすのかという点は明確ではない。

3 構文的な特徴

本節では、「とれる」「おちる」が取る構文を確認する。

- (10)a. ボタンがとれた。
 - b. ボタンが服からとれた。
 - c. 服のボタンがとれた。
- (11)a. 油汚れがおちた。
 - b. 油汚れが服からおちた。
 - c. 服の油汚れがおちた。
- (12)a. ボタンがおちた。
 - b. ボタンが服からおちた。
 - c. 服のボタンがおちた。

上に示したように、「とれる」「おちる」は「A ガ V」、「A ガ B カラ V」、「B の A ガ V」という三つの構文を取ることができる。また、下の(12def)のような「おちる」は着点を表す二格も取ることができる。それに対し、同じ「おちる」でも(11def)の場合、それから、「とれる」の場合は二格を取らない。

- (10)d. *ボタンがいすにとれた。
 - e. *ボタンが服からいすにとれた。
 - f. *服のボタンがいすにとれた。
- (11)d. *油汚れが地面におちた。
 - e. *油汚れが服から地面におちた。
 - f. *服の油汚れが地面におちた。
- (12)d. ボタンがいすにおちた。
 - e. ボタンが服からいすにおちた。

f. 服のボタンがいすにおちた。

(12)は、カラ格、ニ格を取ることにより、「ボタン」の出発段階、到達段階のいずれにも焦点を当てることができる。言い換えれば、(12)のような「おちる」は「ボタン」が「服」から移動するという「ボタン」の位置変化を表す。それに対し、(10)(11)はニ格を取らないことから、「ボタン」の位置変化を表すと言うより、むしろ「服」の変化に注目していると言える。(10)は、「服」の「ボタン」が付いている状態から付いていない状態への変化を表し、(11)は、「服」の「油汚れ」が付いている状態から付いていない状態への変化を表す。以上のことから、「とれる」、(11)のような「おちる」と(12)のような「おちる」を分けて考えることが必要である。本稿は、(12)のような「おちる」は、物の位置変化に焦点を当て、移動動詞の性質を持つと考える。(11)のような「おちる」と「とれる」は移動動詞と異なるタイプの動詞と考え、離脱動詞と名付ける。

このように、「おちる」には移動動詞と離脱動詞という二つの用法があるのに対し、「とれる」には離脱動詞という1つの用法があるということがわかる。そして、以下の表に、それぞれが取る構文をまとめる。

表1 離脱動詞である「とれる」「おちる」

	AガV	AガBカラV	BのAガV	AガCニV
とれる	○	○	○	×
おちる	○	○	○	×

表2 移動動詞である「おちる」

	AガV	AガBカラV	BのAガV	AガCニV
おちる	○	○	○	○

4 離脱動詞の「とれる」「おちる」と移動動詞の「おちる」

本節では、「おちる」の移動用法と離脱用法を比較することで、移動動詞と離脱動詞のガ格名詞の違いを見ていき、離脱動詞の「とれる」と移動動詞の「おちる」を比較することで、移動動詞と離脱動詞のガ格名詞に与えられる解釈の違いを述べる。

- (13)a. ボールがおちた。
 b. 2階のボールがおちた⁶。
 c. ボールが1階におちた。
 (14)a. 油汚れがおちた。

⁶ 「ボール」は2階の付属物ではなく、単に2階にあると解釈される。

- b. 服の油汚れがおちた。
- c. *油汚れが水におちた。

(13)はニ格が取れるのに対し、(14)は取れない。このことから、(13)は移動の「おちる」であり、(14)は離脱の「おちる」であることがわかる。(13)は「ボール」の移動に焦点を当て、移動動詞である「おちる」が用いられるのに対し、(14)においては、「油汚れ」が「服」から離脱することで、「服」がきれいになるというような変化を起こすことを表し、離脱の「おちる」が用いられる。このことから、離脱動詞が用いられるには、「移動する物」が「元にあったところ」に変化を起こすことが必要になる。そのような物としては、「ボタン」のような物の一部分として機能を果たす物が挙げられる。そして、「汚れ」のような、あるものに付着し、離脱するとそのものに変化を及ぼすものも挙げられると考える。本稿では、そのようなものを全て<全体-部分>の関係である名詞とみなす。このように、<全体-部分>の関係にある名詞がガ格にとると考えられる。一方、移動動詞のガ格名詞は(13)が示すように、<全体-部分>の関係でない名詞でも良い。

同様に、離脱動詞である「とれる」も<全体-部分>の関係にある名詞を取る。

- (15)a. 服のボタンがとれた。
- b. 服の汚れがとれた。

(15)においては、「服」の一部分である「ボタン」「汚れ」の離脱することで、「服」は一部分がなくなる、「服」はきれいになるというような変化が起こる。

次に、離脱動詞「とれる」と移動動詞「おちる」が同じく<全体-部分>の関係にある名詞「ボタン」を取る場合に、ガ格名詞に与えられる解釈という観点から見ていく。

- (16)a. ボタンがとれた。
- b. *ボタンがいすにとれた。
- (17)a. ボタンがおちた。
- b. ボタンがいすにおちた。

「とれる」の文では、「～のボタン」のように明示されていないにもかかわらず、「ボタン」はあるものの部分だと解釈される。一方、移動動詞である「おちる」の場合は、「ボタン」はあるものの部分と解釈されず、そのまま1つの個体と解釈される。このことから、「A ガ V」構文を取る際に、離脱動詞を用いることで、Aが「BのA」というように解釈されることがわかる。

以上をまとめると、以下の2点がわかる。

- (18) <全体-部分>の関係にある名詞が離脱動詞のガ格にとる。移動動詞はそのような制限はない。
- (19) 「A ガ V」構文のような、<全体-部分>の「全体」が明示されていない場合には、離脱動詞を用いることで、Aは「BのA」のように、ある物の部分と解釈される。移動動詞の場合は、そのように解釈する必要がない。

また、3節で「とれる」「おちる」が取る構文をまとめる際に、A、Bという表記を用いたが、以上の議論に従うと、「A ガ V」「BのA ガ V」「AがBカラ V」におけるAは<全体-部分>の「部分」であり、「B」は「全体」であることがわかる。

5 離脱動詞の「とれる」と「おちる」

前節では、離脱動詞のガ格名詞は<全体-部分>の関係にある名詞であると述べた。そこで、本節では、NLB、NLTを参考にし、離脱動詞である「とれる」「おちる」が取る「部分」はどのようなものであるかを見る。

まず、「おちる」が取る移動動詞と解釈され、「とれる」が取ることができる名詞は以下のようなになる。

- (20) 葉、髪の毛、皮、入れ歯、(歯の)詰め物、差し歯、取っ手、爪、ボタン、首...
- (21)a. 歯の詰め物がとれた。
b. 歯の詰め物がおちた。
c. 口を開けたら、歯の詰め物が机におちた。
- (22)a. 入れ歯がとれた。
b. 入れ歯がおちた。
c. 口を開けたら、入れ歯が机におちた。

「とれる」を用いることで、「歯の詰め物」「入れ歯」が「歯」や「口」から離れ、なくなり、「歯」「口」が変化することを表す。つまり、「歯の詰め物」「入れ歯」が「なくなる」ことを表す。また、下の(23)の「おちる」は、移動動詞とも離脱動詞とも解釈することができる。

- (23) 葉がおちた。

「葉」を見て、「あっ、葉がおちた」と発話するような場合には、「葉が地面におちた」のように、二格を取ることで、「おちる」が移動動詞と解釈され、「葉」の移動を表す。一方、木の葉が全てなくなった「木」を見て、「(すべての)葉がおちた」と発話するような場合には、二格を取らず、葉がなくなった木の変化に焦点を当て、「おちる」は離脱動詞と

解釈される。この場合には、「葉」が他のところに移動すると捉えず、「葉」が「なくなる」と捉える。以上から、ガ格名詞が「なくなる」と捉えられる場合は、離脱動詞である「とれる」「おちる」のいずれも言えるのに対し、「なくなる」と捉えられない場合には、言えないことがわかる。

次に、両者のいずれも取ることができるガ格名詞を見る。

(24) 汚れ、色、染み、角質、垢、匂い、かさぶた、濁り、メイク、ヤニ……

(25)a. 汚れがとれた。

b. 汚れがおちた。

(26)a. 色がとれた。

b. 色がおちた。

上に示したように、「とれる」「おちる」は「汚れ」、「色」のようなガ格名詞を取ることができる。このような名詞が表すものは「とれる」「おちる」動作で、元にあったところからなくなる。つまり、このような場合も「なくなる」と捉えられる。以上のことから、離脱動詞である「とれる」「おちる」は「なくなる」という動作を表すことがわかる。それ故、離脱動詞は着点を表す二格はとらないと考える。

森田(1977)は、「とれる」のガ格名詞は、「あるものに付属している固体」、「あるものに付着している物」と指摘している。そして、離脱⁷の「おちる」については、「その事物が付着していた本体から離れ取れる」と述べている。(20)(24)に挙げられた名詞を見ると、それぞれ森田(1977)で述べた「付属する固体」と「付着する物」に対応すると考える。本稿では、それぞれを「付属物」と「付着物」と呼ぶ⁸。このように、まとめると、以下のことが言えると考えられる。

(27) 「とれる」は「付属物」「付着物」のいずれも取ることができる。「とれる」は「付属物、付着物がなくなる」という意味を表す。

(28) 「おちる」は「付着物」を取る。そして、「付属物」であっても、「葉」のような、「おちる」動作で、「なくなる」と捉えられる物も取ることができる。この場合の「葉」は「付着物」とみなしても良いと考える。このように、「おちる」は「付着物がなくなる」という意味を表す。

(29)(27)(28)から、離脱動詞である「とれる」「おちる」のいずれも「なくなる」と

⁷ 森田(1977)では、「おちる」が2類に分けられる。1つは、そのもの全体がその位置を離れる場合であり、もう1つ目全体から一部が分かれて離脱する場合である。本稿では、前者を移動と捉え、後者は離脱と捉える。

⁸ 本稿は、移動動詞の「おちる」と離脱動詞の「おちる」と「とれる」を比較することで、離脱動詞と移動動詞の違いに重点を置き、「おちる」と「とれる」の意味の違いを記述することを中心としないため、「付属物」と「付着物」の違いには触れない。この点については、今後の課題とする。

いう動作を表すことがわかる。

次に、「とれる」が取ることができ、「おちる」が取らないガ格名詞を見ていく。

(30) 疲れ、粗熱、痛み、疲労、気疲れ、しびれ、炎症、痒み、冷え、麻痺……

(31)a. 疲れがとれた。

b. *疲れがおちた。 (= (7))

(32)a. 粗熱がとれた。

b. *粗熱がおちた。 (= (8))

このような名詞は「ある物に付着している」と考えにくく、むしろ「ある物の中に滲み込んで、その物の一種の状態である」と考えられる。このような名詞は本稿では、「一種の状態」と呼ぶ。(31)(32)が示すように、「一種の状態」が「なくなる」ことを表すのに、「とれる」は使われるのに対し、「おちる」は使われない。このように、「とれる」は「おちる」より幅広く使われることがわかった。

以上をまとめると、「とれる」は「ある物の付属物、付着物、そして一種の状態がなくなる」意味を表し、離脱動詞である「おちる」は「ある物の付着物がなくなる」という意味を表すことになる。

6 まとめと今後の課題

本稿は、離脱動詞の構文的な特徴を確認し、移動動詞である「おちる」と比較することで、離脱動詞である「とれる」「おちる」のガ格名詞の違い、ガ格名詞に与えられる解釈の違いを考察し、両者の意味を見てきた。まとめると、以下のことが言える。

(33) 構文については、離脱動詞は、二格を取ることができず、「A ガ V」「B の A ガ V」「A ガ B カラ V」という構文を取る。

(34) A と B の関係については、〈全体(B)–部分(A)〉の関係にある名詞は離脱動詞のガ格名詞に立てる。そして、「A ガ V」のような、〈全体–部分〉の「全体」が明示されていない場合には、離脱動詞を用いることで、A が「B の A」のように、ある物の部分と解釈される。

(35) 離脱動詞である「とれる」「おちる」の A については、「とれる」は「付属物」「付着物」「一種の状態」を取り、「おちる」は「付着物」を取る。「とれる」は「付属物、付着物、一種の状態がなくなる」という意味を表し、「おちる」は「付着物がなくなる」という意味を表す。

(36) 離脱動詞の意味が構文に反映し、離脱動詞である「とれる」「おちる」は「部分」が「全体」から「なくなる」動作を表すため、着点を表す二格を取らない。

本稿は、離脱動詞である「とれる」「おちる」と移動動詞「おちる」を比較することで、離脱動詞と移動動詞のガ格名詞の違い、そして、離脱動詞の「とれる」「おちる」のガ格名詞になるものを検討した。今後、離脱動詞である「とれる」「おちる」の意味記述、そして「おちる」のその2つの用法の関係を検討していきたい。

参考文献

- 国広哲弥他 (1982) 『ことばの意味3：辞書に書いてないこと』 平凡社.
柴田武(編) (1976) 『ことばの意味1：辞書に書いてないこと』 平凡社.
柴田武・山田進(編) (2002) 『類語大辞典』 講談社.
宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版.
森田良行 (1977) 『基礎日本語1：意味と使い方』 角川書店.
ベノム・ケリー (2012) 「日本語の離脱動詞と意味の分布」『九州大学言語学論集』33: 107-132,
九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室.
(李響 筑波大学大学院生)

The comparison of separation verbs and motion

verbs:

Focusing on “*toreru*” and “*ochiru*”

LI Xiang

In this paper, we define the separation verbs as: the verbs indicate that the object separate from some place and they do not focus on the moving. Therefore, “*toreru*” is a separation verb. “*ochiru*” has the function of both separation and motion verbs. Comparing the “*ochiru*” which indicate motion with separation verb “*toreru*” and “*ochiru*”, we know the “*ga*” of separation verbs is the none in the whole-part relationship. When the “whole” is not clear, “*ga*” is explained as the “*part*” using the separation verbs. We also show that the separation verbs “*toreru*” and “*ochiru*” express the “disappearance” of the object. This is the reason why the separation verbs do not take “*ni*”.